

翁乃生涯い西行富沢の切をききひまは系
さらけはみやれもに成程と花も朧ようち
まほひまらみ人のあやもやまほく時をい
時乃の親志は志りし秋の月れおくれはま
れく人を体の飄乃いろくよ船の歌くさ浦や
鶺鴒もは又高はゆりたるん時をきく末世のま
うい乃も紀を録ええくまきさ自をれ一えあふ今
うつめりし名あもむし成志のうかこり
氏家のうすしは幸甚はひねらとの郷は入と
下しこそは繁のちしももふらんういをふ

事とて書何のわくして藤はちんちんり
あふくやまきく一百白よたせりとのまき書
うしをねせもあおかく又のちの母乃好士ま
きまけしもあしんせまはにさふしそかこく
とせえいせしんよかきしあゆ

楚水

芭蕉翁句解

高申房 蕉翁句述

芭蕉 蕉よきくもや伊勢乃初に

意法和の字に けまといせあまの言はく使
うまうまの梅子の世はよむけのけま文字の常は
人とえ目とあまの芭蕉翁の形をなすれり例の
風流うまうまの梅子種から来乃うまのけまのけまの
世の世はよむけの初使をくけまのけまのけまの
一字の減るるうまのけまのけまのけまの

冠優絶の姿よ思ひ合ふ新紅或書に恒春此
相と秋風吹しに青歩居る仲は去る浪浪成野木の縁を
称し河水の詞よ思ふ八旬有余れ老翁白髪多る深志
帽子紫檀の昔よりよに布衣を松下の巖に委く嘯き
をりて和琴はわきあきあきる室に和風おろく喜信
かゝる夕言とらん地まも下略只くもあはれあし
かちあはれをり

誰人、蘇るくまに花のそふ

孫農字元公家貧織席為業明詩書為京兆

功曹冬月無被有藁一束暮即朝收

似命や新年瓢をみ味

海門芭蕉居る米み味をりりる瓢何り糧を心と
きり海門人号又乞よとるよ言酒家し兼と称す
瓢銘山素堂 一瓢重黛山自笑称箕山莫慣
首陽餓這中飯顆山

乞の印し門瓢と稱す我世に那

乞し海瓢の文何り略く今在武河某の家の子

花あり又或集りー 子ありーや新子ゆり子
お味 年その川や新子ありー 花集りーおせり白雲
分りあり

子良館の後子柳ありーいー

湧子良子ありーいー柳の集

おりー子と信言ありーと出子良子ありー^コ
を神宮の神饌と奉仕と少女ありーと
希くありー子良乃館ありー凡て神前
柳希ありー出今ありーと

お先若菜あり子良の三つ付

此一葉にし州大津より東の儀別あり柳若菜は
青白乃色立りーとなくの風流さーとつるを
こりーと又ありけとる六の魂ーて駕昇お女の
後もしやりにんごもーに鞆縁乃一棒やんごー
けりー返切
口受

らんまぐにりー若菜あり

拾遺抄の巻下 柳若菜ありと書ありり書度ありあり

と偏き一若葉つむく青つらひ花なりこころゆく
宛んと菫菔の立入りと花は但て若葉摘むと
なりとわい菫菔乃初春のふらふらこころは抑合ふ
ふらふら若葉の粉骨称えり

常は返り眠るは嬌也なり

庄子齊物論曰昔者莊周夢為胡蝶栩栩然胡蝶也
一覺之後之乃罔知也柳乃眠るありて名は柳
白日に作者の如藤の葉とて思ひ寄りて紙書し
たるの故事ありてあるに比しんまことなるの

莊子なり

これより柳はさる志ありぬ

けり許六の字陀法作とこれのよさり柳のまなり
と書るは世の短冊と正のなり法集にかせるなり
柳のさるるありてはなりと記を柳よりみさり柳
といふ初の花と柳乃さるる例は再葉の粉骨と
んてさりけり法玉連環体として詩を連ぬるは
爾葉と多しなり東坡喜禅集寄内静思伊久隔
帰期憶別離時聞漏轉これ連環のなりけりぬ

春日枝や——と引捲——一層

一休福原叡山は好いたまひ——時流徒等古字紙
原こりねの福原坂中此里へけと紙と結せ——の
字と引捲るひ——

二月十七日神保山をめぐりて

福原はよ——原又長此何——か

六句、増賀の信を悲む——の万句をけし上人及らの
思ひ深く伊勢を神交よ——事ありと名刺と珍もの

本現とありたまひ小神夜皆乞食——上院をそそ福
よて下向——多ひらと權集抄子紀元たり只珍かき
名刺ありとやま——二月の嵐——其信とよらる世海の
海表又き——

二月堂に籠りて

あなや——所乃信の皆のあや

け白水多し書とるの初より今も集りて二月をん
あなとよと詞ちよか多しは初信二月那ら——七日子
あなけ日堂前の石井よ若狭由遠敷大明神より観世

昔人故也。わたりし水浦。ある別。眼より。及び。靈筵。以下。す
これと。二月。を。れ。水。た。し。い。す。

馬鹿

又母乃志きりに急し。離子の夢

良糸。信。約。の。結。よ。ほ。ろ。く。と。り。山。田。の。離。子。志。き。夢
又。も。り。ん。母。も。あ。れ。を。吐。け。し。り。ん。は。

将呂丸

有帰より。何んれ。塚乃。墓。子。

呂丸。出。ぬ。お。お。忌。の。禁。し。ん。か。り。春。の。強。尾。し。付。て。一。夜
武。い。の。深。川。は。夜。寐。し。其。後。華。洛。乃。桃。む。坊。は。年。以。誠。て
夜。文。系。れ。秘。旅。中。り。と。黄。泉。の。客。と。句。は。夕。よ。り。ふ
而。帰。し。唐。の。孟。遷。う。詩。は。靡。甚。亦。是。王。孫。草。莫。送。春。香
入。客。衣。其。非。其。蓋。一。名。當。帰。此。二。字。當。帰。し。清。く。夫。の。旅。よ
め。久。し。書。し。る。ふ。国。情。の。題。り。詩。也。寔。れ。多。由。の。二。字。是。と
摘。と。の。句。し。又。楚。辞。九。歌。曰。悲。莫。悲。兮。生。別。離。樂。
莫。樂。兮。新。相。知。こ。の。ん。は。妙。し。と。生。て。當。帰。乃。と。れ。社
か。か。し。き。か。れ。と。は。此。科。と。と。さ。し。り。も。又。夜。と。り。ふ
夕。暮。な。し。ん。草。州。の。塚。は。何。し。ん。心。は。お。せ。た。る。か。し。

此号此詞を摘ぐの當院の傍にあり此もわづらひ
花よりよく日本の威風も白中にありたる一

ちる花やちり響く響の塵

是ハ樂器此画賛有り劉向別録曰 魯有善歌者塵
公發聲清哀拂動梁上塵このんよ塵んよかの梁上
塵を扇をたきよこころの沈滞のよるをたきと稱す

支考、法皇へりたる

けろ海推せよ花より響一具

春句、夏夕之と秋早世の中よりて我も食せし
と傳り勢ひして以院を食れ流しよ毒戒の一句と
なる

一やま

ふさくく風くもの名御

歌よ乃いよまをたに佛をかこせしんひを
深しとしいやん瓦葺ものあしん事あり
この句れあをたよまをたをたの句れ一三
花と毒とをせりなる

布袋の賛

このほしや袋のうちの月と花

鳥丸光唐所著葉集拾月布袋此讚よ 大意と
さしたる指の先くさく月高花も秋乃おぼふく白雲と
けきよかたして正を流の禪味より之

かきゆめや紫胡の原は為くのみ

紫胡の原地をくさくすの流士多し紫胡は葉多し河原葉
初めくふわきと只んをくさくすの葉社の眼を神あり

湖水

りまは池のくさくさみえ

お石山寺の奥の住居をませり此を門人等とま
情の湖水の眺望や世を情こくろくおせり葉あり
一夕の情うらむいそむねのまにるるまにこつたね
何とくし師よるまをくさく

抱くまきくし初より浦まで追分あり

花と花よまの古葉にふまきりまは浦のくさくさみえ

この銘を惜しむる一御初寄の酒と山色遠含空
海明先見且瞻望一とむは清の瑞籬はくまを
帰むこの地ありさむに非ずらむはくまをちりて
浦山の風色よえさりとせしむるをあつらひ

いせを

神垣やあひしうけも涅槃像

今葉集 神垣の向よりとるや夕をすまれし
しけぬは乃まてくはらよかしく無常
迅速の句情は

柳もまたむ月、柳乃花はら

袖見紀よ云け句情集、花うらりしむせうきて人の
未作らう柳の名はちうせうと記しうり、あまを此乃
氣色くくじつきのあつらふ山家集よ、西名を柳
橋よるたう柳よまうしういまは柳はびくはら
うあつら

ほとあすのやあ人のあやめ

郭云のやあ月、あやめあつらふは

句集上

十一

とくゆせたりしあり

評六々亦多語を返す

旅人乃そゆし似し推の花

万葉集よ 家にわねをけりし能を多能詠し
推のそよりの馬を世に陰もせり挽麻ふり
風雅の細ことたとりし人と称するなり

竹研日

ふりし竹の杖の良の養と記

五雜俎曰 栽竹無時雨過便移須留宿
七記取南枝此妙訣也 俗説四月十二日を竹研
日といふ云々い俗説に依りて五月十日又
居家必用 五月十八日栽竹及十三日為竹本
余日栽之百無一死 頗試實効 竹入るる養
益の都合よくすくとむ風俗なり

古き世の記のしと

五穀のしち抄子しけり古本か

けりし古本かし元くす古本か抄子抄子

草子の中へ入るもれと冬の句とありて
古歌より 冬はゆるり此冬のおもひ
かたあきしこ又古稱は画するは清氏書
たてて物さの香に園方ありていふ
笑乃家河の所らとみちし伶人か
そと杉中梅は折子のひ合初く

象浮西行のうら

夕らもや梅もまむ浪の記

伊り梅も象浮のうら身備寺に入

ありて家集 象浮のうら
しるく梅のうら

夏あくとる品

一葉の葉根塔は或は
この一葉をさし言は枝
たよる共一葉はあきと

浪のうら

笑乃歌

常々勤皇の御まじり喜望く今程もく什物等々
先達の御此寺に入主殿の事と伴かりり一書を
向寺に平氏のくくれば御心の一なりし御りり早
けり喜望の月よ喜望乃若と御一と喜望をく
か分る御心一なりし喜望乃若と御一と喜望をく

杜若のくくれば御心一なりし御りり早

伊勢切御喜望の御りり本のくけよかり御
會りりそのはよかり御心一なりし御りり早
りり御心一なりし御りり早

伊勢のくくれば御心一なりし御りり早
上は御心一なりし御りり早
伊勢のくくれば御心一なりし御りり早

山崎宗澄の御りり

伊勢のくくれば御心一なりし御りり早

伊勢のくくれば御心一なりし御りり早
伊勢のくくれば御心一なりし御りり早
伊勢のくくれば御心一なりし御りり早

むき仲覽あつて 字遣、海女をわも織るつゝと
奥一とひのわい 喜むとまわくまけは水字遣有
かきき海女よあつて一又字遣、照信信と龍中
とて遠遠情ふれとれ名さ道ハ撰来か海遠道の
目かたき海女とあつてはわのあつて信師この眼を
このかよりいひしとよはつてあつていひさかあつ
あつてハ情遠道あつてとまきり風雅よあつてれ道ハ
そと織もえりあつてん

這出よ 明能、一吐 夢の夢

奥細く、おのれをたはすとの今へ雲い去来
あつてもなもとらわも喜しと念いむとひと
眼若仲らんとり喜、喜はくはくはく喜よ
物くもまかいやう下よなく嘘と念うまきふとれ
ろいりやも 又麻中屋 坂中屋、別のはあり
えりふ田とれ目とれ意とれ批

よくんまきとて喜死とく垣根うね
つと路よて愛はを向くたつとれ

雪和希能うーろ藪乃か
旅うーん古葉ら梅千成ふ色

秋風う吹渡乃山家ささふ

梅多しーさあや新紙如平流
山屋二万葉年ーむあ乃をれ
春さやけしーふさのふ月と梅
梅う花のうとむれ如ふ山流うふ

伴加ふふら破乃在形大佛とて

む六うー陽冬鳥ーいー能う人
かまらうや柴胡乃系の爲とさう
何乃本れ多も志う次自いう乳
蝶のとよまのり野中能日乾うふ
起ふうーくさう友やせんぬふ胡蝶
古池や嘘とむこむ水乃とと

二つ子の園を眺むて

うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ

一里のうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ

子守唄と早稲のうさぎのうさぎ

丹波市とやういふところ

はなをうさぎのうさぎのうさぎ

うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ



一つはうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ

時をうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ

涙のうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ

夢をうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ

あるうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ

一歩乃はうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ

うさぎのうさぎのうさぎのうさぎのうさぎ

は日中あかきわくくく

灌佛乃日ふう中執あふ若のふん

其角の母み七日遊名

卯能ふも母行ふ宿とすさゆさ

う乃たふやうく紀柳の及く

武府とせくちんく赴く川橋

かりてくく送る来くて餘ふ



乃由といふその也

妻れ穂城きまらふつむ別うれ

松根ちんくを鑑志和富の少影と

あ一法目れ育とせ終やると
さいつたて

ま繁くして水目の中ぬくく

おのちる奥の佛頂和富の山居の影と

本家も唐いやうく似るあく

その奥よりとつとつと人乃は控
きふふ居あり幼信庵といふ信陰
聖潔乃佳境といふ由安勝堂といふ
信建、卯月のとつとつと入る

とつとつと推乃本もあり友本を

此のよみ種とされ強乃すとい

強念をよきとつとつとつとつと

標ゆみ行ふふとつとつとつとつと

雲治のつとつと

乃月ゆきつとつとつとつとつと

大井川のつとつとつとつとつと

とつとつとつとつとつとつと

眉掃をゆきとつとつとつと

ゆきとつとつとつとつとつと

すつとつとつとつとつとつと

素つ己白亭ふりくらあうそ

やとせん慕乃林平一なるりまう

この境をいふはあつとく
乃事母也

かたはる角よりわきよほ磨あじし

是の境をいふはあつとく
橋乃共本

西行法師乃祈念とのこ次

夕暮れをいふはあつとく
すむほ能念

皆田能念見

あつとくや水鏡 結くそんあれ

霧島の通りをぬら 程のゆらとて

杉よりうそやうそ 然るに松のゆら

名霧といふはあつとく
白門乃関のう

あつとくやとて

風流乃そくそく 杉の能田結く

志のふれ雲のちすうの石とて

子苗とふりのりややひし志のふれ

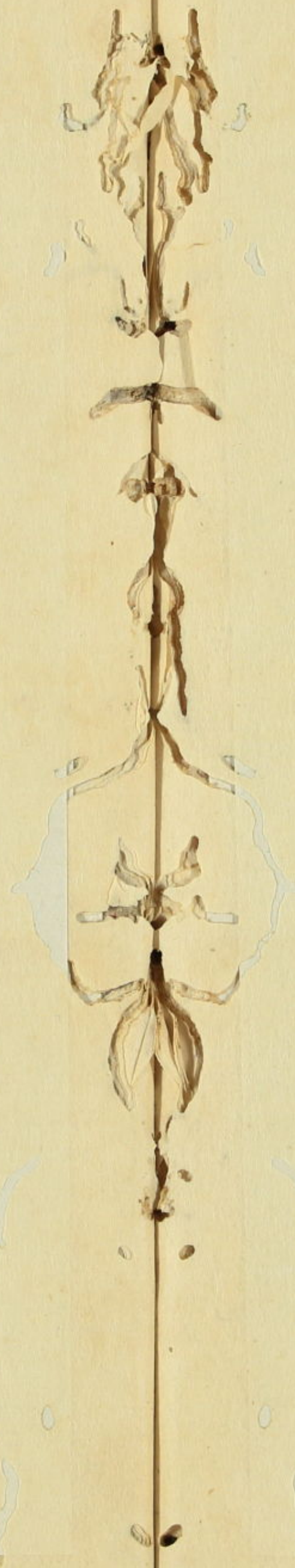
鳴田塚平氏とて

直冬の中いさかふれしうらやあふけ

鳴田塚平

晴雲やうらふれふさふれ暮れ月

立石とて



閑さや岩より志のふれ入せみ乃れ

無常とて

やうてみれとて一たハんはは坪のふ

き波や風おほふりお柏子

雲のふれいしうらふれ月乃山

あふれとてふれとてふれとて

あふれとてふれとてふれとて

夕也乃に于甄むいそ趣ひを利

豆能中末搗とむ心衣衣李

和と業思ふも人輪もやせん

鞠露りよとてすし風の泥

柳らり行道のききし神志業

あまの牙浦るををまきまき

神一しはらりし事



なまの人乃少神もいさお土用が

六月や嶺ふもまきあまも

古裕のたんのねしはつう

馬とくしし荆をたかむむる

衣衣未風波やうはくさ次

所の波むいそ那の草甚正野

なまのあまのゆをたあ

六月五日あつてふりしる川

涼しくてあつてふりしる川

五月五日あつてふりしる川

落柿をみよ

五月五日あつてふりしる川

五月五日あつてふりしる川



西江よ

五月五日あつてふりしる川

画襖

五月五日あつてふりしる川

五月五日あつてふりしる川

五月五日あつてふりしる川

五月五日あつてふりしる川

